

高齢者の口腔機能と足趾把持力との関連性について ：健康寿命の延伸に向けて

著者	福田 昌代, 氏橋 貴子, 小林 容子, 浅枝 麻夢可, 中村 美紀, 御代出 三津子, 吉田 幸恵
雑誌名	神戸常盤大学紀要. 別冊
号	14
ページ	10-10
発行年	2020-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1492/00001121/

2-T-9

高齢者の口腔機能と足趾把持力との関連性について －健康寿命の延伸に向けて－

福田昌代¹⁾

氏橋貴子¹⁾ 小林容子¹⁾ 浅枝麻夢可¹⁾ 中村美紀¹⁾ 御代出三津子¹⁾ 吉田幸恵¹⁾

【目的】我々は、健康寿命の延伸対策を、口腔機能からアプローチする方法を検討するために、今回は、高齢者を対象に口腔機能と転倒に影響する足趾力との関連性について調査したので報告する。

【対象および方法】対象は、健常高齢者 65 歳から 92 歳までの 125 名（男性 57 名、女性 69 名：平均年齢 73.9 ± 5.8 歳）である。口腔機能は、最大舌圧、残存歯数、オーラルディアドコキネシス、舌左右運動の速さ、舌突出能力を、足趾力は市販の計測機器を使用した足趾全屈曲による握る動きでの計測（以下、足趾把持力）、母趾と第 2 趾の挟む動きでの計測（以下、足趾挟力）に加えて最大握力と開眼片足立ちを測定し、それぞれの関連性については相関分析を用いて検討した（神常短研倫第 18-16、19-06 号）。

【結果および考察】最大舌圧は年齢で負の相関、最大握力、最大足趾挟力、最大足趾把持力、開眼片足立ちとの間に正の相関が認められた。舌左右運動では、最大握力、最大足趾挟力、最大足趾把持力との間に負の相関が認められた。オーラルディアドコキネシスでは /pa/ と /ta/ において最大足趾挟力と開眼片足立ちとの間に正の相関が認められた。残存歯数では年齢との間に負の相関が、開眼片足立ちとの間に正の相関が認められた。足趾力は舌の動きや力の強さとの関連性が示されたことから、舌の機能向上トレーニングが足趾力の向上につながる可能性が示唆された。

1) 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科